

静岡県富士郡芝川町

ねこ ざわ い せき

猫沢遺跡

—県営中山間地域総合整備事業柚野の里ほ場整備に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

2006年

芝川町教育委員会

例　　言

1. 本書は静岡県富士郡芝川町猫沢に所在する猫沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は静岡県営中山間地域総合整備事業袖野の里は場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は、平成18年6月17日から平成18年7月19日まで発掘調査、整理事業は引き続き平成18年8月31日まで実施した。

3. 発掘調査・整理事業にあたっては芝川町教育委員会が主体者となり、事業を進めた。

調査主体者・担当　　芝川町教育委員会　教育長　　佐野　實
　　　　　　　　　　生涯学習担当参事　佐野　良文
　　　　　　　　　　係長　　一瀬　正規
　　　　　　　　　　主事　　佐野　英二
　　　　　　　　　　主事　　保竹　貴幸

事業主体者　　静岡県富士農林事務所

指導機関　　静岡県教育委員会文化課

4. 整理事業は芝川町教育委員会が担当し、株式会社東日文化財調査室が支援した。

原稿執筆　　1はじめに (I)調査の経緯　は佐野英二、他は小金澤保雄が担当した。

編集　　小金澤保雄

資料整理参加者　　小金澤保雄・小金澤彩可・望月洋子

5. 報告書作成においては、次の方々にご指導・ご助言を賜った。(敬称略)

植松章八・馬飼野行雄・渡井英吾

6. 本書に係わる発掘調査の記録と遺物は、芝川町教育委員会で保管している。

7. 発掘調査支援参加者は以下のとおりである。

支援調査員　小金澤保雄・小金澤彩可

調査作業員　井上英雄・遠藤宗政・齊藤之弘・村野立巳・渡辺敏男

凡　　例

1. 調査におけるグリッド・基準点

座標は世界測地系、平面直角座標系　8系

調査グリッド A1

平面直角座標　X座標　-82145.000m

Y座標　5980.000m

緯度　35度15分34秒35825

経度　138度33分56秒59772

調査基準点 K-02

平面直角座標　X座標　-82130.549m

Y座標　5992.185m

Z座標　238.047m

2. 土器の記述には以下の内容を含んでいる。

(I) 内の番号は発掘調査時の遺物番号である

色調の判断は『新版 標準土色帖 2002年版』を使用した。

目 次

1はじめ	1
(1)調査に至る経緯	1
2地理的・歴史的環境	1
(1)地理的環境	1
(2)周辺の遺跡と歴史的環境	3
(1)調査の経過方法と方法	5
調査日誌	5
調査区と調査方法	7
4調査の結果	8
(1)遺構	8
竪穴状遺構	8
溝状遺構	14
焼土跡	15
ピット	15
(2)遺物	16
遺構	16
グリッド出土	16
(3)テストピット	19
1号テストピット(TP1)	19
2号テストピット(TP2)	19
5まとめ	20
参考・引用文献	20
写 真	23

図 版

図1 猫沢遺跡と周辺の地形	2
図2 猫沢遺跡と周辺の遺跡	4
図3 猫沢遺跡の遺跡範囲と調査地点	6
図4 標準土層模式図	8
図5 猫沢遺跡 遺構全体図	9
図6 1号竪穴状遺構・1号ピット実測図	10
図7 2号竪穴状遺構実測図	11
図8 1・2号土坑実測図	12
図9 3・4号土坑実測図	12
図10 1・2号溝状遺構 3号焼土跡 2・3号ピット実測図	14
図11 1号竪穴状遺構出土土器 拓影・実測図	17
図12 3号土坑出土土器 拓影・実測図	17
図13 グリッド出土土器 拓影・実測図	17
図14 グリッド出土石器 実測図	17
図15 猫沢遺跡 遺物出土状況図	18
図16 2号テストピット実測図	19

表

表1 猫沢遺跡と周辺の遺跡一覧表	5
------------------	---

写 真 図 版

写真01 調査前風景 北西方向から

- 写真 02 重機による掘削 北東方向から
写真 03 精査作業 北東方向から
写真 04 1号竪穴状遺構 北西方向から
写真 05 2号竪穴状遺構完掘 東方向から
写真 06 3号土坑半截 土器出土状況 北西方向から
写真 07 1号溝状遺構手前 2号溝状遺構奥 南東方向から
写真 08 1号テストピット北壁セクション 南方向から
写真 09 2号テストピット北壁セクション 南方向から
写真 10 調査区東溶岩帯 1号竪穴状遺構完掘奥 南東方向から
写真 11 調査完掘状況 北西方向から
写真 12 調査完掘状況 北方向から
写真 13 猫沢遺跡周辺空中写真①
写真 14 猫沢遺跡周辺空中写真②
写真 15 出土遺物

1 はじめに

(1) 調査に至る経緯

静岡県富士郡芝川町は、富士山の南南西に位置し、山梨県に接している山あいの町である。町名の由来となつた町の中心部を南下する芝川沿いには、縄文時代を中心とする遺跡が数多く発見されている。

町の北部に位置する袖野地区は、北東方向に富士山を望む自然豊かな地域である。現在袖野地区では県営中山間地域総合整備事業が行われており、平成13年1月から3月にかけて実施された試掘調査では縄文時代のものと思われる遺物・遺構が確認されている。

その後、事業者となる静岡県富士林務所と、芝川町教育委員会、芝川町農林商工課、静岡県教育委員会文化課との間で埋蔵文化財の収扱に関する協議を行った。そして、設計案をもとに平成18年6月から7月にかけて発掘調査を行い約150m²の範囲を調査した。

調査は、芝川町教育委員会が調査主体となり、芝川町から支援委託を受けた埋蔵文化財発掘調査において実績のある民間の専門業者が発掘調査支援を行うことになった。

(佐野)

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

猫沢遺跡が所在する静岡県富士郡芝川町は、日本列島中央部が南北方向から南西方向へ大きく屈曲する太平洋側の、駿河湾から富士川を遡った山間に位置し、地理学・地質学的に極めて複雑かつ重要な地域である。

猫沢遺跡は、地質構造の南部フォッサマグナ (Fossa Magna) 地域の西端に位置している。フォッサマグナはラテン語で、「大きな溝」という意味で、古い地層（主に中生代から古生代）でできた溝に、新しい地層（新生代）が堆積してきており、約2,000～300万年前にかけて形成されたと考えられている。

フォッサマグナの深さは6,000m以上と推定され、フォッサマグナ西縁の糸魚川-静岡構造線 (Itoigawa-Shizuoka Tectonic Line) は、日本列島の中央部を南北に横断して西南日本と東北日本を分ける姫川から静岡に至る約250kmの大地溝帯である。このフォッサマグナ地域西縁は、太平洋から日本海にかけて伊豆・箱根・富士の火山帯、中部山岳地帯には乗鞍岳・焼岳などの活動する火山群が存在する特徴がある。その一端が、1989年7月13日、伊豆半島の東海岸、伊東市のわずか3km沖合で海底噴火による手石海丘と呼ばれる海底火山が誕生したことで、人々に知れることとなった。この地域では1980年以来ほとんど毎年のように群発地震が発生している。このことは、この地域が人々の生活に大きな影響を与える地質・火山活動が多い地域である証拠を示している。

この地域の地震や火山等の活発な活動は、地球上で最も複雑な地質構造に由来している。日本列島は、地質構造でフォッサマグナを境に西を西南日本、東を東北日本と呼んでいる。その西縁の糸魚川-静岡構造線はユーラシアプレートと北米プレートと呼ばれるプレート（約100kmの厚さのある硬い岩盤）の境界と考えられるようになってきている。これによると西南日本はユーラシアプレート、東北日本は北米プレートに乗っていることになる。さらに北米プレートの東には太平洋プレートがあり、これにより東から、フォッサマグナの南のフィリピン海プレートにより南から、日本列島が押されているのである。伊豆半島が乗っているフィリピン海プレートは年に4cm程、ほぼ北西の方向に移動し、ユーラシアプレートの下に潜り込んでいるとされている。太平洋プレートとフィリピン海プレートはともに海溝やトラフをつくって潜り込んでいる。こうして、日本は3つのプレートが1カ所で接する三重点（トリプルジャンクション）が近くに2つもあるという、極めて複雑な様相を示している。このため、世界の地震や活火山で解放されるエネルギーの約10%は日本とその周囲で起きており、世界的に見ても、地質・火山活動が非常に活発な地域である。

また直下型地震を引き起こす活断層のうち、糸魚川-静岡構造線南部とその周辺には、活動度A級（1000

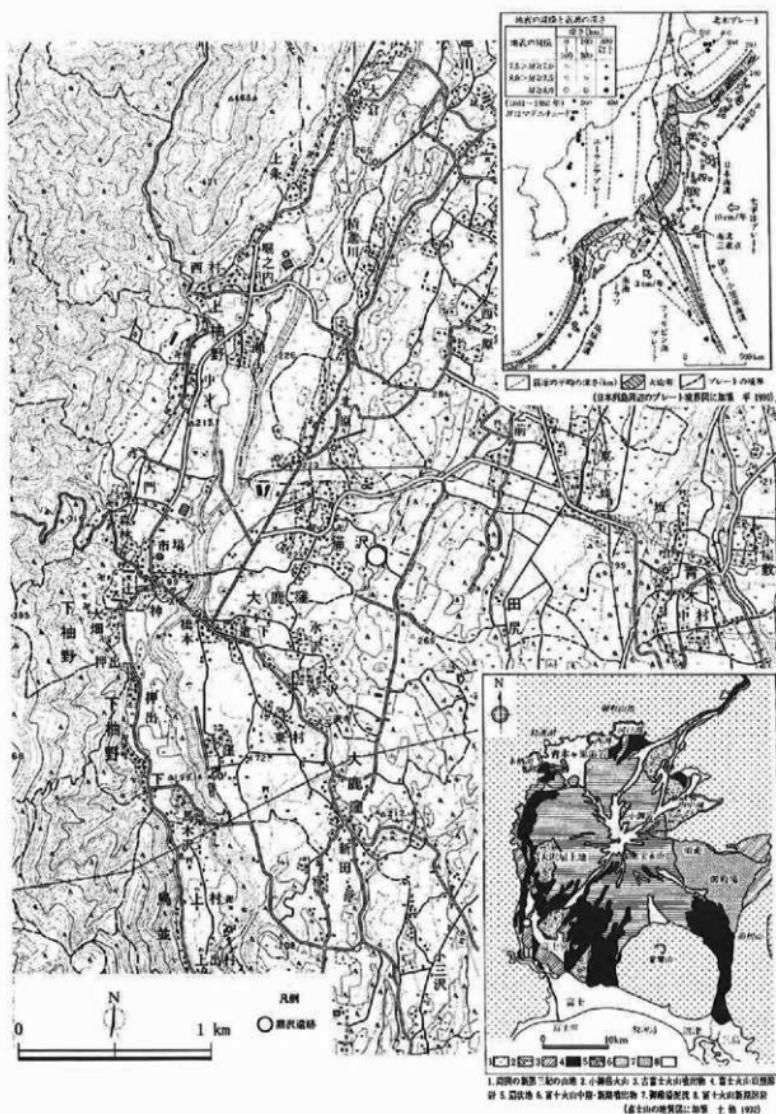


図1 猫沢遺跡と周辺の地形

年あたり 1.0m 以上 10.0m 未満の平均変位速度を示す) と評価されている活断層 - 国府津 - 松田断層(神奈川)、丹那断層(静岡)、富士川断層(静岡)などがあり、現在も巨大地震を引き起こすその活動のメカニズム解明と地震そのもののへの注意が向けられている。

このフォッサマグナは 1875 (明治 8) 年に来日し 1877 (明治 10) 年に東京大学初代地質学教授となったドイツの地質学者ナウマン博士 (E.Nauman 1854~1927) によって、1885 年に糸魚川から静岡に至る特徴ある地形を「Grosser Graben」(大地溝帶) として、翌(1886) 年には、これをラテン語の「Fossa Magna」に改めて報告された。また野尻湖の湖底発掘で有名なナウマンゾウの名前は、日本でゾウの化石をはじめて研究したことから博士の名前にちなんでおり、考古学的にも関係が深い人物である。また糸魚川 - 静岡構造線は 1918 年に、東北帝国大学(現東北大) の地質学者・古生物学者である矢部長克博士 (1878 年~1969 年) によって提唱された。

猫沢遺跡の北東には、この地域の象徴でもあり裾を大きく広げる円錐型火山(コニーデ)の美しい富士山が高く聳えている姿を見る事ができる。そして猫沢遺跡は新旧の富士山の火山活動によって形成された地形の上にある。今の富士山の姿になるまでは小御岳火山(こみだけかざん)と呼ぶ古い火山を覆いかぶさるように約 8~10 万年前に古富士火山が誕生した。猫沢遺跡の地形は、東から西にかけて緩やかに標高を下げる羽舎丘陵と呼ばれている斜面地形である。その表層は、今から約 2 万年前の氷河期に古富士火山の水分を大量に含んだ火山灰・溶岩岩片・火山岩片によって形成された古富士泥流である。かつては古富士山頂から緩やかな斜面が猫沢遺跡まで続く山麓の末端であった。その後新たな火山活動の活発化によって、新富士火山が古富士火山を覆うように誕生し、時には激しく大量の溶岩を噴出した火山活動を繰り返してコニーデの美しい富士山となった。それは旧期・中期・新期の溶岩と呼ばれ、厚く噴出している。芝川に沿って分布する芝川溶岩は、旧期溶岩に属しており、約 1 万年前であると推定されてきたが、大鹿窪遺跡内に堆積した溶岩が芝川溶岩であるとされる事から、少なくとも從来の炭素 14 年代測定では約 11,400 年以前に堆積したことが発掘調査によって明らかになった。一方、羽舎丘陵の東側は崖状の急傾斜となっているが、この南北方向の崖線は富士川断層の延長と推定される大宮断層と呼ばれていた急傾斜地形で、形成されたのも同時期と推定される。

富士山の火山活動は縄文時代以降も活発な活動が続いており、今から約 3,000 年前の縄文時代晩期には大沢スコリアと呼ぶ火山砂礫を噴出した大噴火が現在の静岡市まで降り注ぎ、このスコリアを主とする固い層を地元では「フジマサ」と呼び、考古学ではおおよそ縄文時代と弥生時代を分ける變層となっている。その後有史以来だけでも、平安時代延暦 19 (800) 年、貞観 6 (864) 年と続けて大爆発を起こしている。貞観 6 年の爆発では今の青木が原樹海と本柄湖・精進湖・西湖が形成された。最も新しい最大規模の大爆発は、江戸時代宝永 4 (1707) 年に起こった宝永噴火である。火山灰は離れた横浜周辺でも約 10 cm 堆積している。この大爆発の 49 日後にはマグニチュード 8.4 の巨大地震である宝永東海地震が起きており、噴火と地震が関係していることが推定される。この大噴火を最後に大きな噴火はこれまで起きていない。しかし防災上、生活面においてきわめて重要な火山であることに変わりはなく、防災マップの作成と検討、新たな火山・地震対策、そして研究が進行している。

このように、猫沢遺跡はフォッサマグナ地域の西縁である糸魚川 - 静岡構造線、また極めて複雑で変化の激しいトリブルジャックションと呼ばれる地質の上にあり、北東には静けさをこの 300 年間保っている富士山が聳えている姿を見ることができる場所にあり、日常は豊かな自然環境に恵まれた静かな農村風景である。

(2)周辺の遺跡と歴史的環境

猫沢遺跡周辺では平成 13 (2001) 年以降、開発行為の増加に伴って埋蔵文化財発掘・確認調査事例が積み重ねられてきている。ここでは最近の調査成果を中心に記述する。

平成 13 (2001) 年 2 月 1 日 ~ 2 月 27 日にかけて県営中山間地域総合整備事業袖野の里ほ場整備に伴う試掘調査が 110 地点実施され、3 月 21 日に報告された。周知の遺跡である猫沢遺跡とその周辺は蔓根工区と呼ばれ 38 地点の現地調査が行われた。結果、縄文時代を主とする遺構がほぼ蔓根工区全域、遺物は蔓根工区北側で確認された。今回の発掘調査実施のための根拠となった。

猫沢遺跡から南南西へ約 1.4 km の地点に、県営中山間地域総合整備事業袖野の里ほ場整備に伴う試掘調査

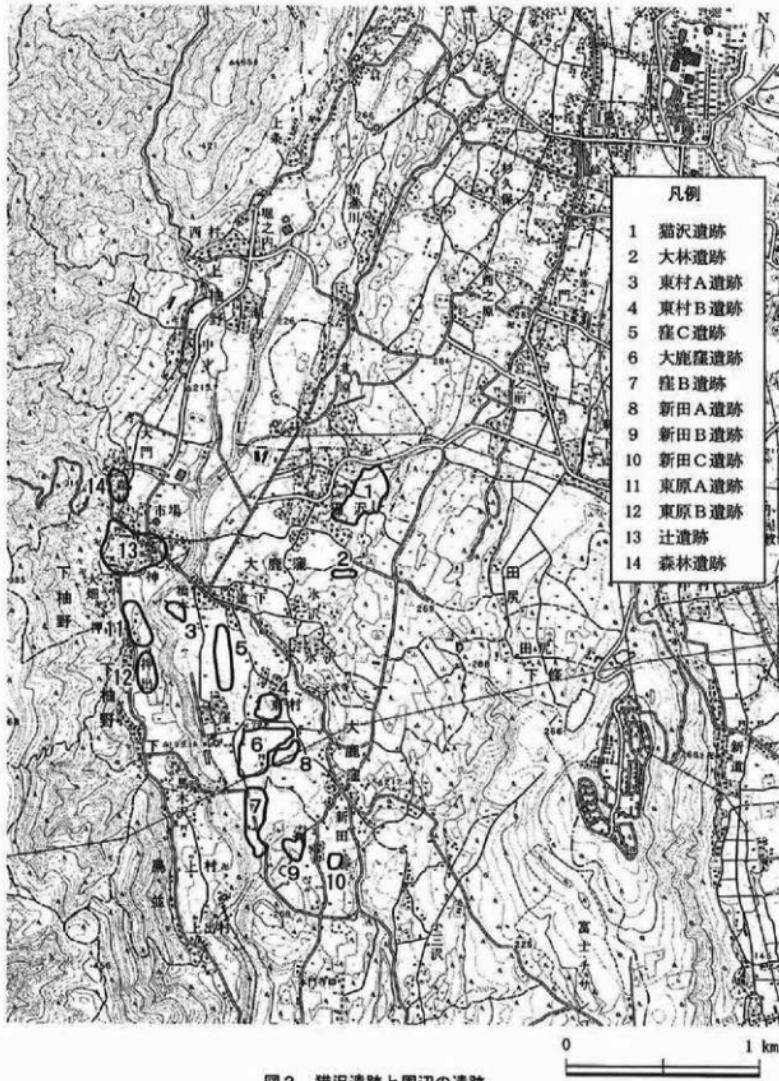


図2 猫沢遺跡と周辺の遺跡

の結果、新発見の遺跡となった大鹿窪（旧窪A）遺跡と窪B遺跡の2遺跡が所在する。発掘調査が平成13（2001）年10月～平成14（2002）年3月にかけて、事前調査として実施された。その結果、全国ではじめて縄文時代草創期の10基（軒）を超える竪穴状遺構（住居跡）の集落跡や、隆線文土器・爪形文土器・押圧縄文土器・尖頭器・石鎚・矢柄研磨器等の貴重な遺物が多量発見されるに至った。その発掘調査報告書は平成15（2003）年3月20日に遺構編、平成15（2006）年3月17日に遺物編がそれぞれ刊行された。

大鹿窪遺跡北西、芝川右岸沿いに位置する窪C遺跡では、町営宅地造成事業に伴う確認調査が平成15（2003）年11月に実施され、土器を伴わないが縄文時代から旧石器時代にかけてと推定される遺構や石器が確認された。そのことを受けて平成15（2003）年12月に発掘調査を実施し、その結果明確な時期を特定できなかったが縄文時代草創期以前の層位を確認面とするピット群が検出された。磨石等の石器が出土したが、土器を伴っていないかったことから無土器時代もしくは旧石器時代の可能性のある遺跡であることが改めて確認された。平成16（2004）年3月22日に報告書が刊行されている。

窪C遺跡の芝川を挟んでの対岸に位置する、弥生時代の遺物が出土することで有名な周知の遺跡である辻遺跡では、平成16（2004）年1～2月にかけて、町消防団第1分団結所建設に伴う事前調査として発掘調査が実施された。その結果、狭い範囲の縄文時代包含層から大量の土器・石器が出土した。時期は縄文時代中期後半から後期を中心とするものであった。平成16（2004）年3月26日に報告書が刊行されている。

このように芝川町北部は遺跡が広範囲に立地しており、その内容も徐々に明らかになってきている。特に縄文時代の早い時期の草創期から早期にかけての極めて重要な遺跡群が所在する地域であるという認識が高まっている。

No.	遺跡名	時代	種別	所在地	遺構・遺物
1	猫沢遺跡	縄文（早～後）	散布地・集落跡	猫沢字上谷戸	竪穴状遺構・土坑・溝状遺構、 縄文土器・石鎚・磨石/敲石
2	大林遺跡	縄文	散布地・集落跡	猫沢字大林	土坑・石器
3	窪C遺跡	旧石器・縄文・ 弥生時代以降	散布地・集落跡	大鹿窪字窪	集石遺構・土坑・柱穴列跡・石皿・磨石
4	東村A遺跡	縄文（早）	散布地	下袖野字東原	縄文土器
5	東村B遺跡	縄文（中）	集落跡	下袖野字東原	縄文土器
6	大鹿窪遺跡 ・中世	縄文早期～前期 ・中世	散布地・集落跡	大鹿窪字新田 ・山・東村	竪穴状遺構・土坑・配石遺構・集石遺構、 縄文土器・尖頭器・石鎚・打製石斧・磨石・敲石
7	窪B遺跡	縄文	集落跡	大鹿窪字新田	集石遺構・土坑・ピット・磨石
8	新田A遺跡	縄文	散布地	大鹿窪字新田	縄文土器
9	新田B遺跡	縄文	散布地	大鹿窪字新田	縄文土器
10	新田C遺跡	縄文	散布地	大鹿窪字新田	縄文土器
11	東原A遺跡	縄文	散布地	下袖野字東原	縄文土器
12	東原B遺跡	縄文	散布地	下袖野字東原	縄文土器
13	辻遺跡	縄文中期～後期 ・弥生時代以降	散布地・集落跡	下袖野字辻 ・天神	竪穴状遺構・柱穴列跡・配石遺構・集石遺構、 縄文土器・石鎚・打製石斧・磨石・敲石・石皿
14	森林遺跡	縄文（中）	散布地	上袖野字森林	縄文土器

表1 猫沢遺跡と周辺の遺跡一覧表

3 調査の概要

(1) 調査の経過と方法

調査日誌

第1日 曙り・晴れ

現場立会いが行われる。教育委員会担当、農林商工課担当、県富士農林事務所担当、地権者代表が出席し、発掘調査現場にて、作業内容・工程についての確認と説明が行われた。



図3 猫沢遺跡の遺跡範囲と調査地点

主な事項として、重機による表土削除を行い残土は場内処理する、重機掘削後に手作業による精査作業を行う、作業期間は約1ヶ月、作業時間は09:00-16:30とする。周辺の水田耕作に支障を来たさないように残土を慎重に処理する等が確認された。

第2日 曇り

基準点設置測量作業を行う。

第3日 晴れ・曇り

重機によって表土・攪乱層掘削作業を行う。一部では溶岩帯が表土掘削の初期段階から確認される。並行して仮設設備搬入、安全柵設置作業を行う。

第4日 晴れ・曇り

調査作業員による遺物包含層と遺構確認を行う。遺構では焼土跡・溝状遺構が調査区東の溶岩帯に沿って確認される。包含層精査では調査区中央から南西にかけてさらに溶岩帯が確認される。

第5日 晴れ・曇り

作業員による遺物包含層と遺構確認を行う。溶岩帯西から南にかけて遺構・包含層を確認・精査、1・2号竪穴状遺構の半截、1・2号土坑半截、1号ピット半截等を行う。教育長による現場視察が行われる。

第6日 曇り

遺構・包含層の精査を行う。遺構・遺物測量を行う。1・2号土坑、1号ピット、1・2号竪穴状遺構内の1・2号焼土跡等の遺構入力を行う。農林商工課担当が現場視察を行う。

第7日 曇り・晴れ

遺構・包含層の精査、3号土坑半截を行い、土器片が出土する。県富士農林事務所担当が現場視察を行う。

第8日 曇り・晴れ

遺構・包含層の精査、遺構測量を行う。包含層精査により調査区中央西から土器、石材等が出土する。

第9日 曙り

遺構・包含層の精査を行う。文化財審議委員会の視察が行われる。

第10日 曙り

遺構・包含層の精査を行う。1号溝状遺構を完掘する。富士黒相当層から黄～橙褐色ローム層の漸移層相当層にかけて剥片が出土する。

第11日 曙り・晴れ

縄文時代包含層下位より剥片が出土する。この点を受けて下位層の遺構・遺物の有無を確認するためサブトレーンチ(2×1m) 2ヶ所を地形に沿って設定・掘り下げを行う。

第12日 曙り・晴れ

遺構・包含層精査、サブトレーンチ2ヶ所の掘り下げを行う。

第13日 小雨・曇り

精査作業を終了する。調査終了完掘写真撮影を行う。

第14日 小雨・曇り

設備搬出作業を行う。

第15日 小雨・曇り

仮設設備の撤収作業を行う。

調査区と調査方法

調査区のグリッドは世界測地系の平面直角座標B系を基準として10mを1グリッドとしている。調査グリッドの南西端を基点としてAIグリッドと名づけた。AIの平面直角座標値はX座標が-82145.000m、Y座標が5980.000mである。グリッド名は東西方にA-Bの文字、南北方向に1-2-3の数字を付した。

調査は重機によって表土層を掘削後、作業員による手作業によって遺物包含層精査、遺構・遺物精査を行った。調査に係わる測量調査記録・写真記録は写真の一部以外はデジタルマップを基盤としたトータルステーション・パーソナルコンピュータ・デジタルカメラをシステム化した遺跡GISシステムによるデジタル処理を行いペーパーレスによる迅速な記録保存を行った。

(2) 層序

基本層序は調査グリッド A2 の 2 号テストピットの北側セクションとその西側延長上の調査区端壁面とした。この地点は盛土層として 1 層の現耕作土を利用していたことから厚く堆積していた。

表土層掘削段階で調査区中央の北から南にかけて溶岩帯が露出しており、「馬の背」状に緩やかに弧を描く様な溶岩帯の尾根部分では層序の堆積が十分でなく遺構の検出は少なかった。溶岩帯が標高を下げるにしたがって層序の堆積が確認された。本調査区では大鹿窟遺跡 3-1 調査区を中心とした地点でみられた縄文時代と弥生時代を区分する鍵層である大沢スコリア層の堆積が調査区南西端において薄く確認できた。また縄文時代草創期と早期の遺物包含層が 4 層黒褐色土層として堆積していた。

第 1 層	暗褐色土層	現耕作土	層厚 7.5cm
第 2 層	暗茶褐色土層	現耕作土床土	層厚 5cm
第 3 層	褐色土層	オレンジスコリアをやや多く含み締りがあることから大沢スコリア層である。層厚 6cm	
第 4 層	黒褐色土層	オレンジスコリアを少量含み締りがある縄文時代遺物包含層である。層厚 30cm	
第 5 層	暗黄褐色土層	黄色土を細かく含み粘性がやや強く遺物包含層である。縄文時代の遺構確認面でもある。層厚 20cm	
第 6 層	黄褐色土層	黄色土を多く含む粘性の強いローム層でこれより下位の層は無遺物層である。層厚 15cm	
第 7 層	橙褐色土層	締り・粘性ともに強いローム層である。層厚 15cm	
第 8 層	溶岩層	玄武岩質の気泡の多い溶岩層で本調査区の基盤層である。	

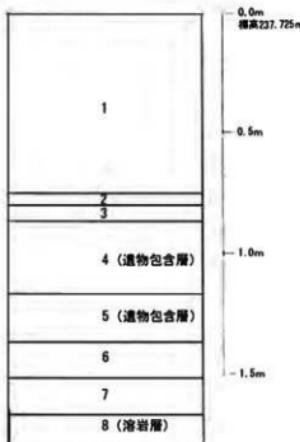


図 4 標準土層模式図

4 調査の結果

(1) 遺構

豊穴状遺構

1号豊穴状遺構

調査区中央南 A2 グリッド、標高 237.10m に位置する。

検出状況は縄文時代遺物包含層の精査掘り下げの過程で土器片 1 点が出土、その南側より焼土跡、南東側は溶岩帯を立ち上がりとする全体に浅く窪むやや硬い面が確認された。包含層と覆土層との識別が困難であったので、遺構確認面まで全体を掘り下げた結果、平面形態がやや歪みのある楕円形を呈する掘り方が検出された。壁の立ち上がりを有する住居跡とするには、炉跡・柱穴等の施設が明確でなく遺物出土量も極めて少なく不十分であった。

床面とした面より上位の覆土の検出はできなかった。掘り方の深さは 0.20m を測り、覆土は 3 層に分層された。1 層は黒褐色土で締り・粘性ともにやや強く、オレンジスコリアを少量含んでいる。2 層は暗褐色土で締り・粘性ともにやや強く、オレンジスコリア・炭化物・焼土粒をそれぞれ少量含んでいる。3 層は暗黄褐色土で締り・粘性ともにやや強く、オレンジスコリアを少量と黄褐色土をやや多く含んでいる。

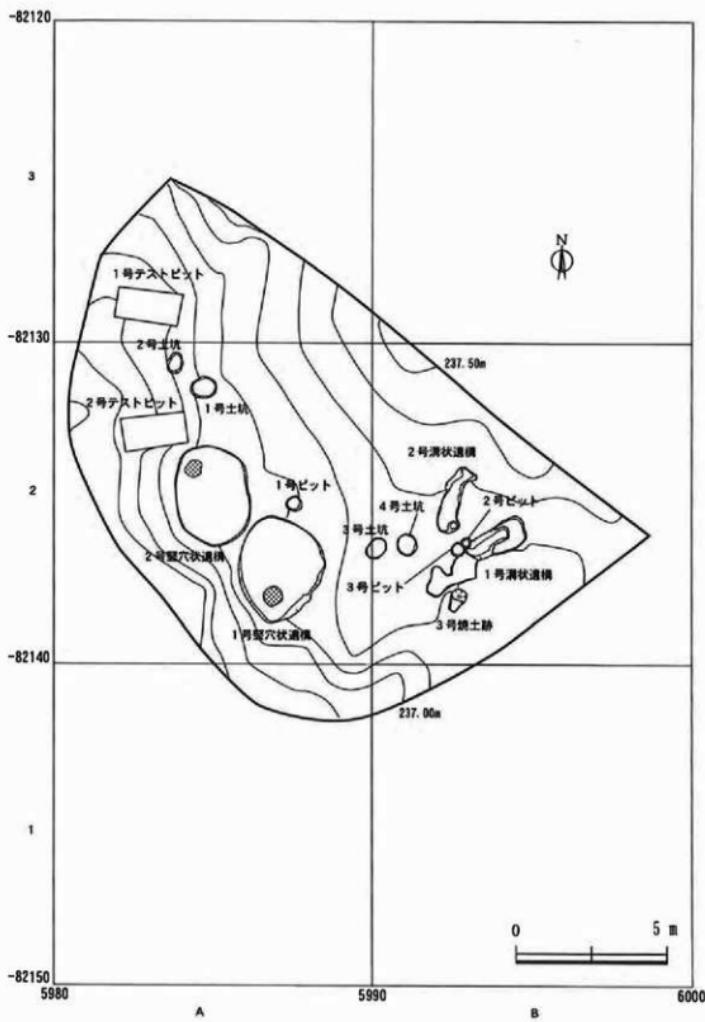


図5 猫沢遺跡 遺構全体図

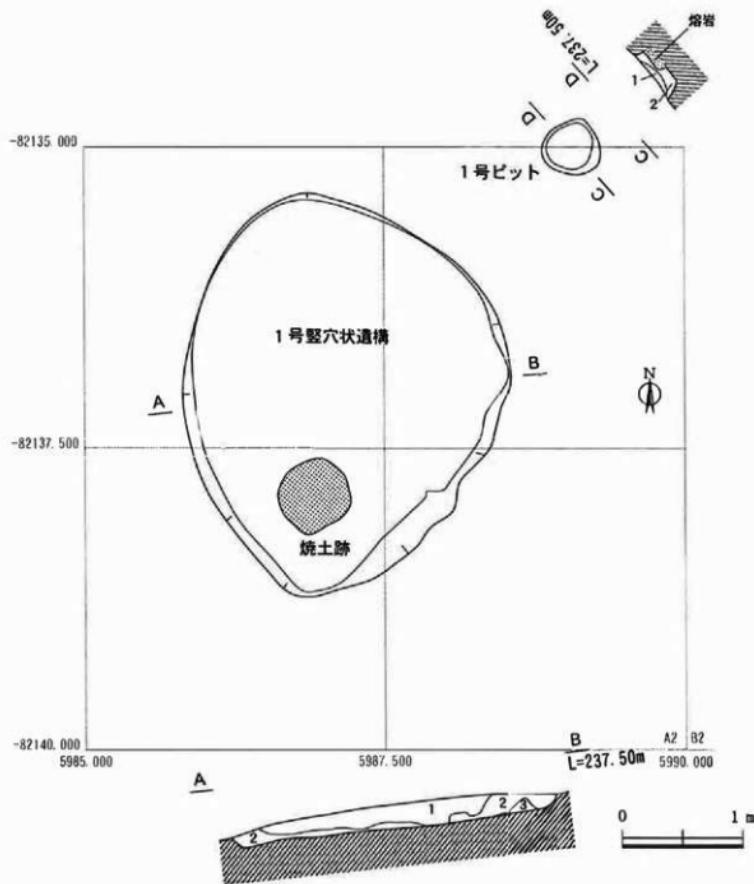


図6 1号竖穴状遺構・1号ピット実測図

規模は長軸方向が3.34m、短軸方向が2.75m、長軸方向の方位は南北を測る。

焼土跡は南側端に偏って検出された。平面形態はやや歪みがある円形に近く、規模は長軸方向が0.64m、短軸方向が0.60m、深さは0.17mを測る。覆土は2層に分層された。1層は暗赤褐色で縦り・粘性とともにやや強く、焼土粒を含んでいる。2層は暗褐色土で縦り・粘性とともにやや強く焼土粒が少量含まれている。検出された底は溶岩であった。焼土粒の検出量が少なく繰り返し頻繁に使用された痕跡は認められなかった。

遺物は縄文時代後期に属する磨消縄文土器が2点出土した。掘り方覆土からは玄武岩質の角が研磨された礫が2点出土した。

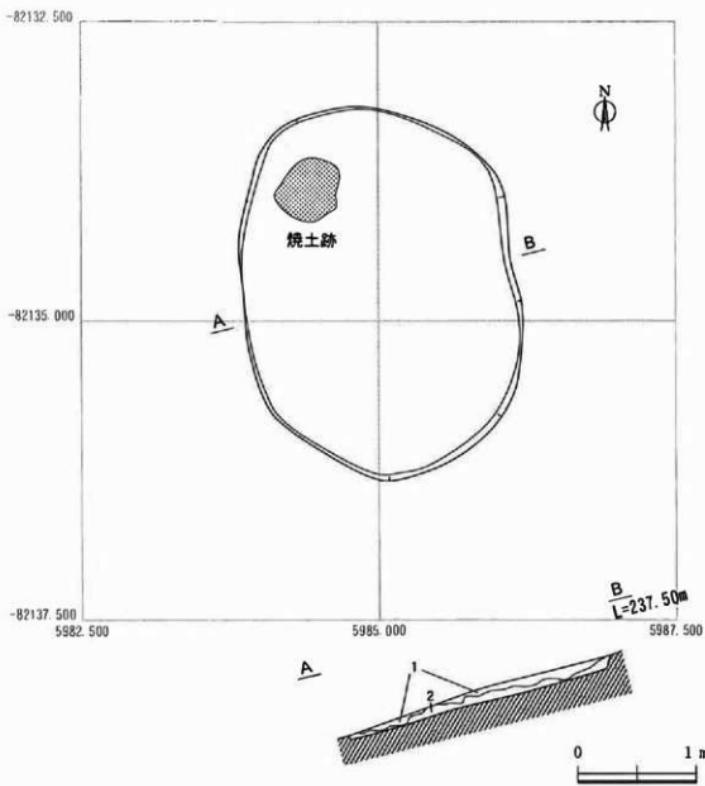


図7 2号竖穴状遺構

2号竖穴状遺構

1号竖穴状遺構の北西に隣接、調査区中央南 A2 グリッド、標高 237.00m に位置する。

検出状況は縄文時代遺物包含層の精査掘り下げの過程で、北側より焼土跡が検出され、黒曜石の剥片・チップが出土し、全体に浅く窪む面が確認されたが、1号竖穴状遺構同様に包含層と覆土層との識別が困難であったので全体を遺構確認面まで掘り下げる結果、平面形態が楕円形を呈する掘り方が検出された。壁の立ち上がりを有する住居跡とするには施設が明確でなく、遺物出土量も極めて少ないと1号竖穴状遺構と同様である。

床面より上位の覆土の検出はできなかった。掘り方覆土は2層に分層された。1層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含んでいる。2層は暗黄褐色

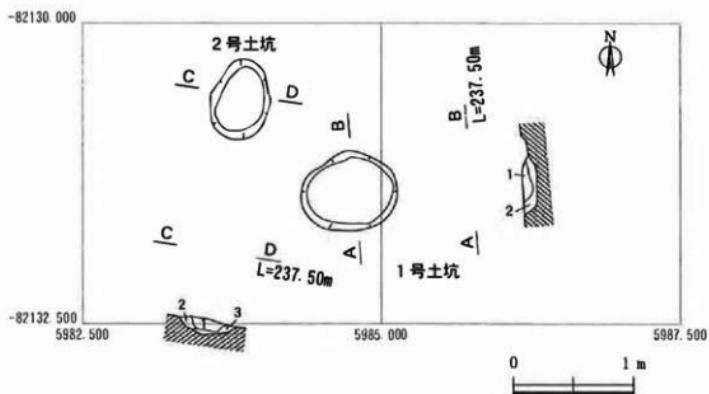


图 8 1·2号土坑实测图

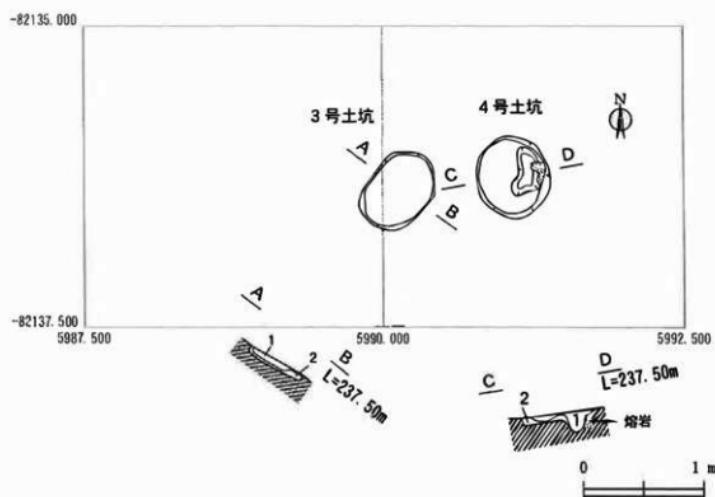


图 9 3·4号土坑实测图

土で締りはよく、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。

規模は長軸方向が 3.16m、短軸方向が 2.35m、長軸方向の方位は N-5-W を測る。

焼土跡は北西端に偏って検出された。平面形態は歪みがある不正形、規模は長軸方向が 0.58m、短軸方向が 0.51m、深さは 0.17m を測る。覆土は 2 層に分層された。1 層は暗赤褐色で締り・粘性ともにやや強く、焼土粒を含んでいる。2 層は暗褐色土で締り・粘性ともにやや強く焼土粒が少量含まれている。検出された底は溶岩であった。焼土粒の検出量が少なく繰り返し頻繁に使用された痕跡は認められなかった。

遺物は黒曜石製の薄片とチップが出土したが製品および土器の出土はなかった。

土坑

1号土坑

2 号竪穴状遺構北側に位置し、2 号土坑と並んで検出された。調査区北西 A2 グリッド、標高 237.00m に位置する。

遺構北側の一部が搅乱によって削平されているが、全体が検出された。規模は長軸方向が 0.81m、短軸方向が 0.66m、深さは 0.12m、長軸方向の方位は N-81-E を測る。平面形態は楕円形を呈し、覆土は 2 層に分層された。1 層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含んでいる。2 層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。3 層は暗黄褐色土で 2 層に比べて明るい色調である。締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色土を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

2 号土坑

調査区北西 A2 グリッド、標高 236.90m に位置する。

規模は長軸方向が 0.68m、短軸方向が 0.51m、深さは 0.12m、長軸方向の方位は N-9-E を測る。平面形態は細長い楕円形を呈し、覆土は 3 層に分層された。1 層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含んでいる。2 層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。3 層は暗黄褐色土で 2 層に比べて明るい色調である。締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色土を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

3 号土坑

1 号竪穴状遺構の東に位置し、4 号土坑と並んで検出された。調査区南東 A2・B2 グリッド、標高 237.20 m に位置する。

規模は長軸方向が 0.70m、短軸方向が 0.52m、深さは 0.09m、長軸方向の方位は N-45-E を測る。平面形態は楕円形を呈し、覆土は 2 層に分層された。1 層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含んでいる。2 層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。

縄文時代早期後半条痕文系土器片が 1 点、南東端の覆土下位底付近から出土した。

4 号土坑

調査区南東 B2 グリッド、標高 237.20m に位置する。

規模は長軸方向が 0.68m、短軸方向が 0.61m、深さは 0.08m、長軸方向の方位は N-10-W を測る。平面形態はほぼ円形を呈し、覆土は 2 層に分層された。1 層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含んでいる。2 層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

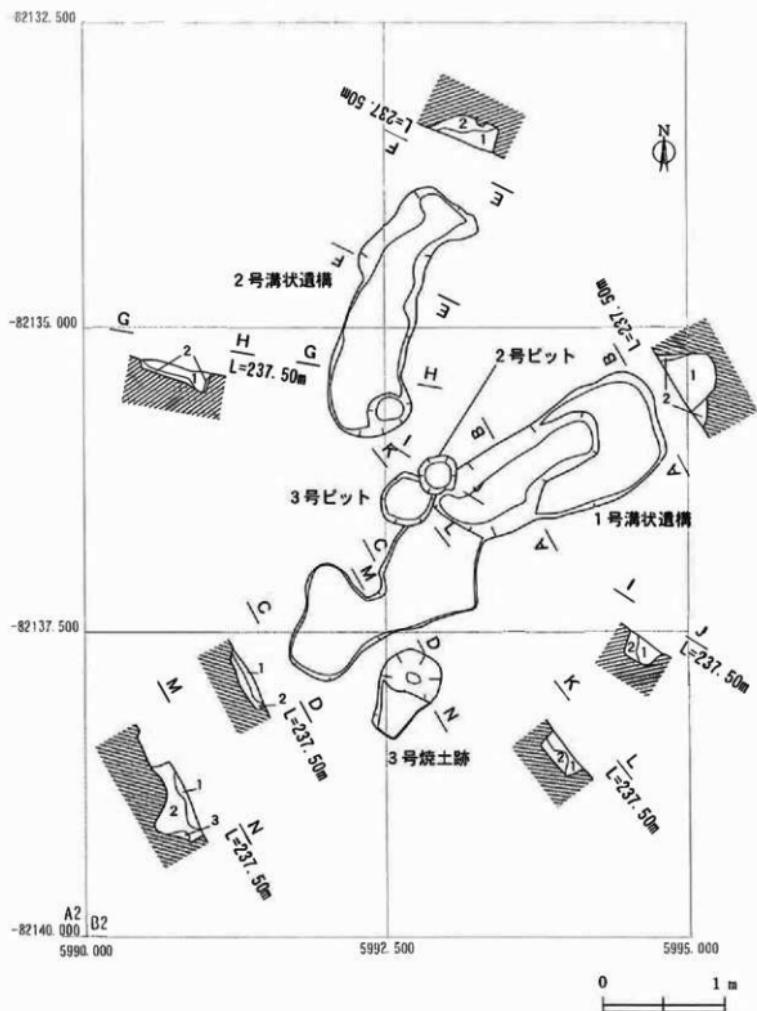


図10 1・2号溝状遺構 3号焼土跡 2・3号ピット実測図

溝状遺構

1号溝状遺構

調査区東B2グリッド、標高237.20mに位置する。

平面形態はほぼ直線的に北東から南西方向を指向しており、規模は最大長が 3.72m、最大幅が 0.94m、長軸方向の方位は N-50-E を測る。北東側の約 1/2 は細長い土坑状に一段深く掘り下げられている。覆土は SPA-SPB では深さが 0.36m、SPC-SPD では深さが 0.12m、とともに 2 層に分層された。1 層は黒褐色土で締りやや強く、粘性は強い。オレンジスコリアを少量含んでいる。2 層は暗褐色土で締り・粘性はともに強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

2 号溝状遺構

1 号溝状遺構の北西隣、調査区東 B2 グリッド、標高 237.20m に位置する。

平面形態はわずかに弧線的に北北東から南南西方向を指向しており、規模は最大長が 2.12m、最大幅が 0.74m、長軸方向の方位は N-23-E を測る。南東端にピットが 1 基切り合って検出された。平面形態は上場が楕円形、下場が円形で長軸長が 0.44m を測る。

覆土は SPE-SPF では深さが 0.22m、SPG-SPH では深さが 0.17m、ともに 2 層に分層された。1 層は黒褐色土で締り・粘性はともにやや強い。オレンジスコリアと炭化物を僅かに含んでいる。2 層は暗黄褐色土で締り・粘性はともにやや強い。オレンジスコリアを少量、黄褐色ブロック土を多く含んでいる。

遺物は出土していない。

焼土跡

3 号焼土跡

1 号溝状遺構の南隣、調査区東 B2 グリッド、標高 237.20m に位置する。

平面形態は、上場が細長い楕円形、下場が円形でピット状である。規模は最大長が 0.76m、最大幅が 0.48m、深さが 0.36m、長軸方向の方位は N-25-E を測る。

覆土は 3 層に分層された。1 層は暗赤褐色土で締り・粘性はともにやや弱い。炭化物を多くと焼土粒を少量含んでいる。2 層は黒褐色土で締り・粘性はともにやや強い。大きめの炭化物と焼土粒を含んでいる。3 層は茶褐色土で締り・粘性はともにやや強い。炭化物と焼土粒を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

ピット

1・2・3 号ピット

1 号ピットは 1 号堅穴状遺構北に隣接する調査区 A2、標高 237.00m に位置する。平面形態は円形、規模は長軸方向が 0.48m、短軸方向が 0.46m、深さは 0.12m を測る。覆土は 2 層に分層された。1 層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含んでいる。2 層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

2・3 号ピットは 1 号溝状遺構と切り合い関係にあり、調査区東 B2 グリッド、標高 237.30m に位置する。

1 号溝状遺構-3 号ピット→2 号ピットの関係にある。2 号ピットは平面形態が円形、規模は長軸方向が 0.34m、短軸方向が 0.32m、深さは 0.18m を測る。3 号ピットは平面形態が円形、規模は長軸方向が 0.42m、短軸方向が現況で 0.40m、深さは 0.16m を測る。2・3 号ピットとも覆土は 2 層に分層された。1 層は暗褐色土で締りやや強く、粘性はやや弱い。オレンジスコリアと黄褐色ブロック土をそれぞれ少量含む。2 層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。オレンジスコリア・暗黄褐色ブロック土を少量含んでいる。

遺物は出土していない。

2・3 号ピットの周辺は 2 号溝状遺構内ピットや 3 号焼土がピット状を呈しており、3 号ピットを含めほぼ直線的に並んでいる。これらピット中心の間隔は 2 号溝状遺構内ピットから 3 号焼土までが 2.26m、方位は N-5-W を測る。

(2) 遺物

遺構

1号堅穴状遺構

図 11-1・2(1・2)は縄文時代後期に属する磨消繩文土器の胴部片で同一個体である。図 11-1(1)は覆土上位で一括、図 11-2(2)は覆土下位から出土した。

表面は横・斜位の沈線文に斜繩文が施文され、無文部は丁寧なナデ調整が施される。内面はナデ調整である。色調は外面が黒色(Hue7.5Y)を呈し、焼成は良好で硬質、胎土には粒の大きな砂粒や石英・長石・金雲母を含み、器厚は 9 mm を測る。

3号土坑

図 12-1(12)は縄文時代早期後半に属する条痕文系土器の胴部片である。表面は無文に横位の条痕文調整に近似する掠痕調整、内面は指頭圧痕による調整である。内外面に纖維が目立ち特に内面には獸毛状の纖維痕が特徴的である。色調は明赤褐色(Hue5SYR)を呈し、焼成は良好、胎土には纖維の他にやや粒の大きな砂粒や石英・長石・雲母を含み、器厚は 10 mm を測る。

グリッド出土

土器

縄文時代早期後半

図 13-1(23)は縄文時代早期後半に属する絡条体圧痕文系土器の口縁部片で、直線的にやや開いて立ち上がり口唇部は平坦に仕上げている。表面は横位のナデ調整後に横位の断面が「V」字形を呈する絡条体が 2 条施文される。内面は指頭圧痕にナデ調整である。色調はにぶい褐色(Hue7.5YR)を呈し、焼成は良好で硬質、胎土には纖維・砂粒・石英・長石・雲母を含み、器厚は 8 mm を測る。

縄文時代中期

図 13-2(3)は縄文時代中期に属する集合沈線文土器の口縁部片で、直線的にやや開いて立ち上がり口唇部は平坦に仕上げている。表面は斜位の集合沈線文が施文される。口唇部と内面はミガキ状に丁寧な調整が施され、色調は赤褐色(Hue2.5YR)を呈し、焼成は良好で硬質、胎土には砂粒に金雲母を多く含み、器厚は 11 mm を測る。

縄文時代後期

図 13-3(7)は縄文時代後期に属する沈線文土器の胴部片で、内湾気味にやや開いて立ち上がる。外表面は先端に丸みのある棒状具による曲線的な沈線文が連続して施文される。内面はやや丁寧な調整が施される。色調は赤色(Hue10YR)～灰褐色(Hue7.5YR)を呈し、焼成は良好で硬質、胎土には砂粒を含み、器厚は 5 mm を測り、薄手である。

無文土器

図 13-4(43)は所属時期不明の無文土器の胴部片である。内面は指頭痕調整がやや顕著である。色調は赤褐色(Hue2.5YR)を呈し、焼成は良好で硬質、胎土にはやや粒の大きな砂粒や白色粒を含み、器厚は 12 mm を測る。

石器

石鏃

図 14-1(13)は黒色が混ざるもの透明度のある黒曜石製の小型の石鏃である。平面形態は先端部が鋭く細い二等辺三角形に基部が浅く抉りのある凹基、左脚部先端が僅かに短い、ほぼ完形品である。法量が長さ 1.25 cm・幅が 1.00 cm・厚みが 0.34 cm・重さが 0.3 g と小さな石鏃である。裏表の一部に未調整な剥離面を残すが側縁とともに押圧剥離による丁寧な調整が施され、両側縁は一部鋸歯状を呈している。



図11 1号竖穴状遺構出土土器 拓影・実測図



図12 3号土坑出土土器 拓影・実測図

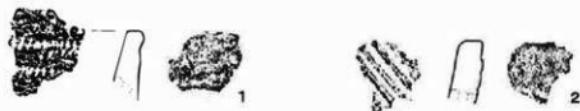


図13 グリッド出土土器 拓影・実測図

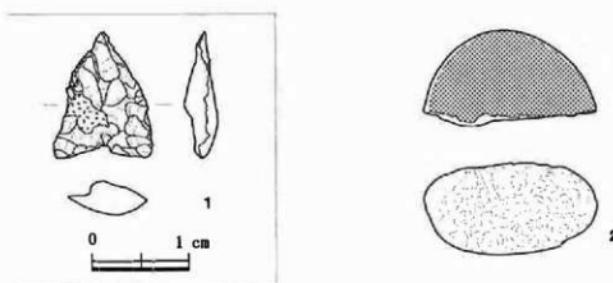


図14 グリッド出土石器 実測図



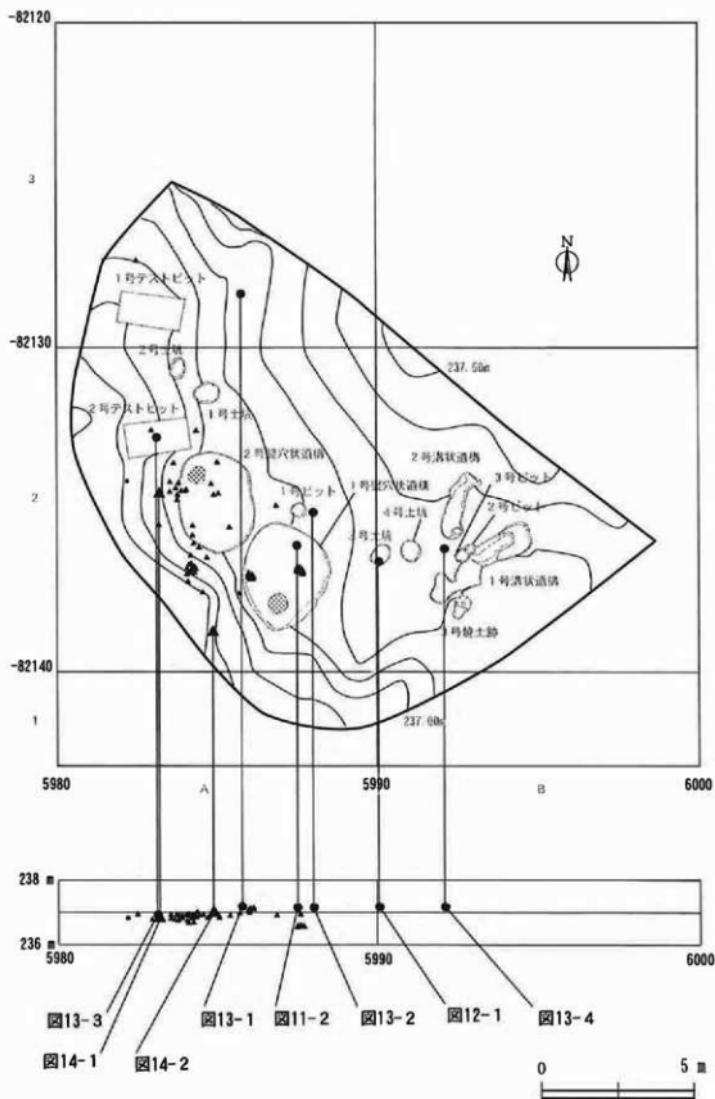


図15 猫沢遺跡 遺物出土状況図

蔽・磨石

図14-2(9)は安山岩質の蔽・磨石である。平面形態は楕円形を呈すると推定され、全体の約1/3が残存する。現存法量が長さ3.9cm・幅が7.1cm・厚みが3.7cm・重さが135.5gを測る。裏面に磨面、割れ目が平坦で滑らかであることから柔らかな繊維質のものを磨いていたと推定される。このような機能を有する蔽・磨石は大鹿塙遺跡縄文時代草創期に属する遺構と包含層から出土したスタンプ形石器と呼ばれる石器に類似するものである。

(3) テストピット

調査区中央から西にかけてのA2グリッドにおいて、縄文時代包含層下位から漸移層にかけて黒曜石製の石器・剥片・チップがやや輕まりをもって出土したことから、漸移層下位以下の堆積状況と遺構・遺物の有無を確認するためにテストピット2ヵ所を設定した。

1号テストピット(TP1)

調査区北西A3グリッドに2×1mを設定して、基盤層である溶岩帯まで掘り下げた。テストピット内より遺構・遺物の検出・出土がなかったことから、層位の確認をして記録した。

2号テストピット(TP2)

調査区西A2グリッドに2×1mを設定して、基盤層である溶岩帯まで掘り下げた。テストピット内より遺構・遺物の検出・出土がなかったことから層位の確認をして記録、基本層序として北壁セクションを使用した。

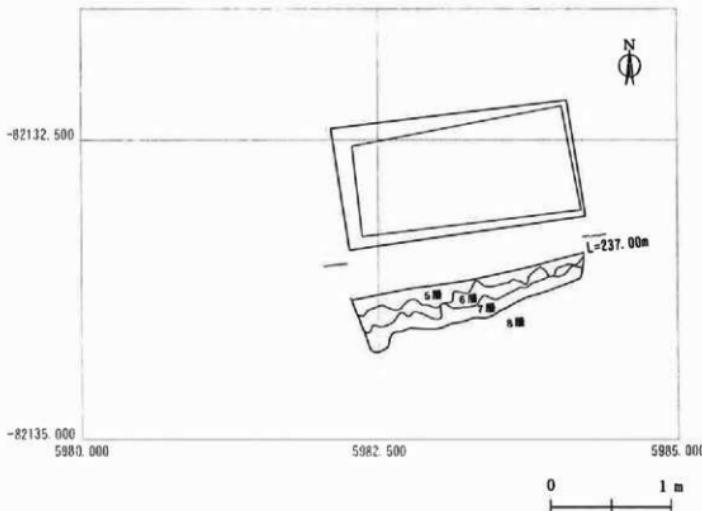


図16 2号テストピット実測図

5 まとめ

今回の調査はほ場整備事業に伴う工事によって切土され、遺跡が消滅する地点のみが調査対象地であったことから、約150 m²と狭い範囲発掘調査であった。このような発掘調査ではあったが、以下に述べる点が成果及び課題として指摘される。

猫沢遺跡は、古富士火山の火山噴出物が表層を覆っている羽鶴丘陵南西向きの日当たりの良い緩斜面に位置しており、北東には豊富な湧水地帯があり、現在でも飲料水として利用されている。西の芝川にはさらに上流の豊富な水量を集めた流れがあり、そのさらに西には天子山地の急峻な地形と樹林が広がっている。この様に猫沢遺跡は、周囲の遺跡同様の豊かな自然環境に恵まれている。

出土遺物の土器には、縄文時代早期後半に属する条痕文系土器と考えられる土器片・図11-1(12)が3号土坑から出土した。内部の胎土には獸毛状繊維が目立って含まれており、外面には条痕文とも考えられる擦痕状調整が施されていることを特徴としている。さらに同じく縄文時代早期後半に属すると考えられる絡条体圧痕文系土器・図12-1(23)がグリッドから出土している。条痕文系土器とともに胎土に金雲母が含まれない。これらの土器が属する縄文時代早期後半の土器が出土・確認されたのはこの猫沢遺跡では初例であるが、羽鶴丘陵に位置する遺跡では縄文時代早期以前の土器が出土する例が多いことから、自然な出土状況であると考えられる。

出土遺物の石器に、楕円形の、半割されたと考えられる敲・磨石・図13-2(9)がグリッドから出土したが、その割れ口は滑らかで、繊維質の柔らかなものを敲いていた跡と考えられた。この様な形態と機能を有する石器は、大鹿窪遺跡の縄文時代草創期の豊穴状遺構や包含層から数多く出土した敲・磨石の中に見られたスタンプ形石器と同様であった。

この土器と石器から、今後猫沢遺跡において、縄文時代早期及びそれ以前の遺構と遺物が纏まって検出・出土する可能性が高まると考えられる。先に縄文時代草創期の集落跡が検出された大鹿窪遺跡と同様に、北東から東にかけて溶岩帯に囲まれた地形に位置することも良く類似している。また、今後のさらなる検討課題であるが、3号土坑付近のグリッドから出土した無文土器・図12-4(43)がある。これは、内部が指頭痕調整のみであることや、胎土に繊維が含まれず粒のやや大きな砂粒や白色粒が目立ち、焼成が良く硬質であること、また色調等の特徴から、大鹿窪遺跡出土の縄文時代草創期の隆線文土器に近似しているが、細片であることから不確実な点が多く、この点を指摘するだけにとどめる。

また出土確認された包含層は、愛鷹山麓の富士黒(FB)相当層から漸移(Zn)相当層であった。この点から遺物に縄文時代に古い時期のものがあったとしても不思議ではない状況であった。

縄文時代中期以降の土器も出土しており、遺構との関連を述べなければならないが、1号豊穴状遺構で出土した2点の土器の所属時期で1号豊穴状遺構の所属時期を説明するには、土器の所属時期の一般的な遺構のもつ石圓炉や柱穴等の施設と1号豊穴状遺構が明らかに異なっていることから不十分である。そのなか3号土坑だけが土器の所属時期をもって縄文時代早期後半と推定される。

以上述べた点は推定部分が多く、全体として出土遺物が少ないことがさらにその点を不確実なものとしている。今回の発掘調査の結果についての評価は今後の大規模な課題として残されたが、以上に述べた点により、今後の発掘調査ではより注意深い調査が必要となったといえる。

参考・引用文献

個人論文・書籍等

木島勉 1995 「縄文時代における翡翠製玉類の生産―研究の現状と課題―」

栗野克美 1990 「南原遺跡」『静岡県史 資料編1 考古』所収

小山真人 2001 「火山がつくった伊東の大地と自然―火山の恵みを生かす文化構築の提案―」『伊東の今・昔―伊東市史研究・第1号―』所収

土隆一監修・茨木雅子編 1992 『静岡県 地学のガイド 静岡県の地質とそのおいたち』(㈱コロナ社)

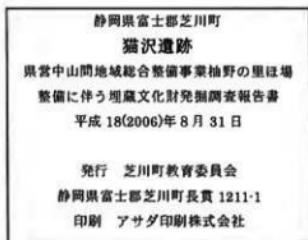
平朝彦著 1990 『日本列島の誕生』岩波新書 148 岩波書店

報告書等

- 糸魚川市・地震防災シンポジウム実行委員会 2001 『シンポジウム 糸魚川—静岡構造線と地震～住民・専門家・自治体による地震防災をめざして』
- 糸魚川市教育委員会・博物館 2005 『資料集 「ナウマン博士データブック」』
- 芝川町教育委員会 1972 『駿河小塚』
- 芝川町教育委員会 1981 『(駿河) 小塚遺跡第2次調査報告書』
- 芝川町教育委員会 1995 『小塚遺跡 一金刺建設株式会社倉庫建設に伴う埋蔵文化財第3次発掘調査報告書及び芝川町道改修工事に伴う埋蔵文化財第4次発掘調査報告書一』
- 芝川町教育委員会 1995 『小塚遺跡 一個人住宅建設に伴う埋蔵文化財第5次発掘調査報告書一』
- 芝川町教育委員会 2003 『大鹿窪遺跡 駿B遺跡 一県営中山間地域総合整備事業抽野の里は塙整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一(遺構編)』
- 芝川町教育委員会 2004 『駿C遺跡 一宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 芝川町教育委員会 2004 『辻遺跡 一芝川町消防団第1分団駐所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 芝川町教育委員会 2006 『大鹿窪遺跡 駿B遺跡 一県営中山間地域総合整備事業抽野の里は塙整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一(遺物編)』
- ヒスイ文化フォーラム 2003 『花開くヒスイ文化 一縄文時代におけるヒスイとそのひろがりー』
- ヒスイ文化フォーラム他 2005 『神秘の勾玉 一弥生・古墳時代におけるヒスイとそのひろがりー』
- フォッサマグナミュージアム 2006 『フォッサマグナってなんだろう』
- 富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡 県道富士宮芝川線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 富士宮市教育委員会 1989 『小松原A遺跡 県道富士宮芝川線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡 一富士宮市遺跡詳細分布調査報告書一』
- 富士宮市教育委員会 2000 『富士宮市遺跡地図 一第3版一』
- 富士宮市教育委員会 2003 『富士宮市の遺跡II』
- 富士宮市教育委員会 2005 『富士宮市の遺跡III ワラビ平遺跡 塚本古墳第2次 浅間大社第5次 発掘調査報告書』

ふりがな	ねこざわいせき						
書名	猫沢遺跡						
副書名	静岡県営中山間地域総合整備事業袖野の里ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小金澤保雄						
編集機関	芝川町教育委員会						
所在地	静岡県富士郡芝川町長貫1211-1 電話0544-65-0402						
発行年月日	平成18年8月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
	市町村 遺跡番号						
ねこざわいせき 猫沢遺跡	静岡県富士郡 芝川町猫沢 字上谷戸	22382	35度 15分 34秒 35825	138度 33分 56秒 59772	2006/06/17 ～ 2006/07/19	150	ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ねこざわいせき 猫沢遺跡	集落址	縄文時代 早～後期	竪穴状遺構 土坑 溝状遺構	縄文土器 石器	



写 真

写真図版01

写真01
調査前風景
北西方向から



写真02
重機による掘削
北東方向から



写真03
精査作業
北東方向から



写真図版02

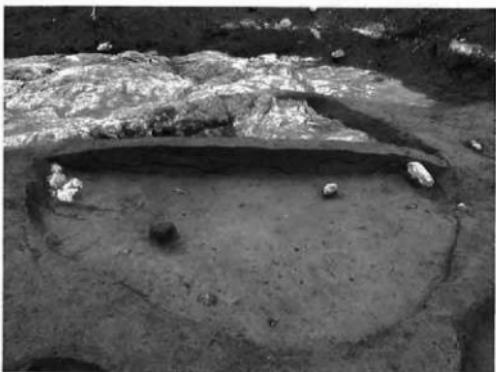


写真04

1号竪穴状遺構
北西方向から



写真05

2号竪穴状遺構完掘
東方向から

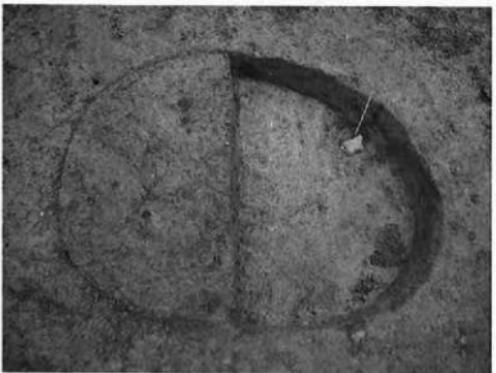


写真06

3号土坑半截
土器出土状況
北西方向から

写真図版03



写真07
1号溝状造構
手前
2号溝状造構
奥
南東方向から



写真08
1号テストピット
北壁セクション
南方向から

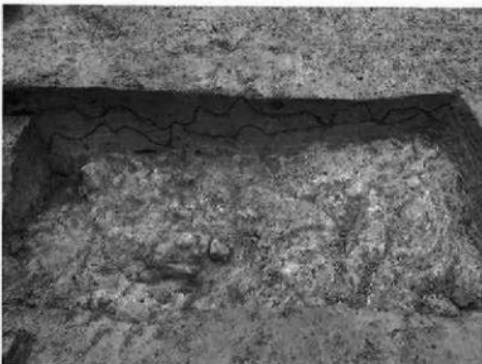


写真09
2号テストピット
北壁セクション
南方向から

写真図版04



写真10
調査区東溶岩帯
1号竪穴状遺構完掘
奥
南東方向から



写真11
調査完掘状況
北西方向から

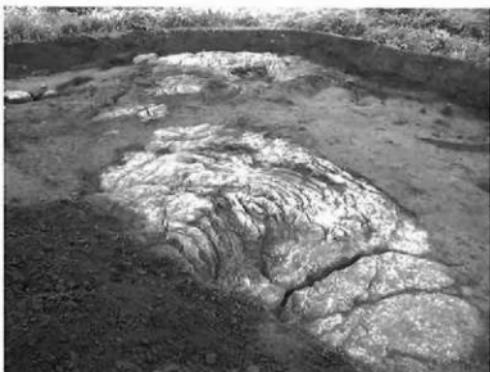


写真12
調査完掘状況
北方向から

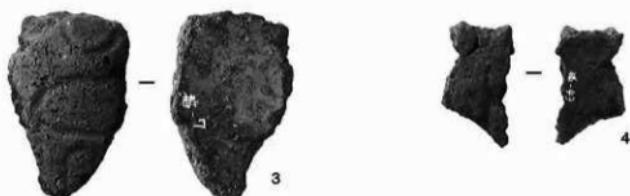


写真13
猫沢遺跡周辺空中写真①

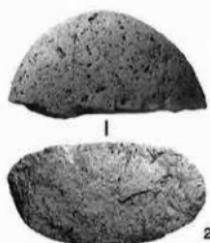


写真14
猫沢遺跡周辺空中写真②

写真図版06



グリッド出土土器



グリッド出土石器

写真15 出土遺物